
雪花

にゃんチュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪花

【Nコード】

N5661Y

【作者名】

にゃんチュウ

【あらすじ】

古くから伝わる歌がある。歌は皆から愛唱されてきた。しかし、歌の意味を知る者はいない。歌が作られた記憶を遡ったとき、一人の姫と従者の存在がいた。二人は、どんな運命があるのだろうか…。

出会い

一

縁側に座りながら、唄っている少女がいた。

少女の元に歩み寄る人影が見える。

「綾香ちゃんは、その歌が好きだねえ」

「お祖母ちゃん、うん。私この歌大好き！」

「そうかい。お祖母ちゃんも子どもの頃から唄っていたよ。お祖母ちゃんのお母さんもみんな唄ってたんだよ」

「すごいね。そんなに昔からのお歌なんだね。お祖母ちゃん、この歌は誰が作ったの？」

綾香の祖母は、遠い眼をした。

「この歌はね……」

歌を作った人物を分らない。歌は昔から語り継がれて、皆から愛唱され大人や子どもも、老人からも慕われてきた。どこか儚い歌は聴く者を魅了する。

しかし、歌はいつ作られ、それを作った人物、歌の意味を知る者はいない。

歌の意味を知ったとき、人は何を感じるだろうか……。

白い雪よ かすみは 花よ

川のように ながる 傍に花よ

白い雪よ かすみは 花よ

花は 雪と寄り添い 命限り

白い雪よ かすみは 花よ

雪を見上げれば 花は咲く

壮大な池には、鯉が優雅に泳いでいる。池の辺に見事な堇が咲き誇っている。

紫色の堇が、風と共にゆらゆらと揺れていて春の匂いを運ばせる。その光景は実に明媚であった。

池の辺に近づいてくる足音が聞こえる。それは、小さな女子の姿だった。女子の肌は色白で、頬は桜色である。

眼はつぶらでとても可愛らしい顔つきをしている。

女子は、そっと堇に触れようとした。その手首には、勾玉が太陽の日差しで鮮やかな七色に輝く。

そのとき、女子の後ろから慌てふためく声が聞こえた。

「姫様、そのままでは、お手を触れたら手を切ってしまうさる。

この、和鋏をお使い下さい」

女子に和鋏を渡したのは乳母であった。女子は和鋏を受け取り堇の花柱を伐った。女子の顔は満足そうに笑みを浮かべた。

「綺麗に御座いますね。生け花になさいますか？」

女子は、首を横に振った。

「ううん。姉上に差し上げるの」

「それは、姉君様はお喜びになれますよ」

その言葉を聞いて眼を細め嬉しそうにまた笑った。

ここは、「宮」という国……。

宮国は、倭と中国の文明を持っていた。

倭は島国であったが、宮国は大陸である。

政は、中国と同様に国王が存在する。人々の生活用品や衣類は倭の文化が主流である。

宮国は、一つの国にまとまっておらず分裂していた。それが、「和宮」・「貝塚」・「淋城」の三つの国が存在した。

三国の中で、大国であった東にある和宮国の王には、二人の姫がいた。

一の姫の母親は側室であり、二の姫の母親は、この国の正室であったが二年前に病死した。

和宮国の特徴は、本家と分家が存在する。敷地内に大きな王城が二つある。本家とは、国を治める王の城だ。

分家は、王の補佐をする役目を持つ王城である。

本家の王城の造りは王に相応しく広大であり、瓦屋根には見事な龍が天を見上げている。龍とは、王の象徴ともいえよう。

王城の室は、洗練されており、どの家具も国の貴重な物ばかりだ。また、広大な庭園は本家の誇りであった。

春には、壮麗な桜が咲き誇り、秋には夕日に染まる紅蓮のような紅葉を観ることができる。

一方、分家の城は狭小である。瓦屋根には飾りは施されていない。室は、王族らしい豪壮ではあるが本家に比べ控えめだ。庭園は無いが中庭がある。

次代の王が二人の姫のうちとなるとしたら、どちらかが二つの王城の主となる。しかし、王になれるのは一人だ。

それを決めるのには、武術・勉強などにおいて優れた者が王になれるのであった。

円窓から、室内に風が流れ込み肌にそつと優しく触れる。

草の靡く（なび）音が、かすかに聞こえる。

「兵は国の大事なり。死生の地、存亡の道、察すべからず。その無備を攻め、その不意に出ず。多算なれば勝ち、勝算なれば勝たず」

十四歳の一の姫、弥夜は、王族に必要な兵法を全て完璧に答えた。

それには、講師も感心する。

「弥夜様は、大変覚えがよろしゅう御座いますな」

弥夜は、微笑みながら深くお辞儀をした。

「恐れ入ります」

室の外から誰かの小走りの音がこちらに近づいてくる。

「姫様、今そちらに行かれてはなりません」

乳母の声が聞こえたと同時に勢いよく襖が開いた。風と共に、弥夜の文机の上に置いてあった紙は宙に浮き襖の手前に落ちた。弥夜と講師は眼を丸くした。

部屋に、入ってきたのは八歳になった、二の姫の李梗りぎょうだった。

乳母は落ちた紙を拾い弥夜に手を添えて渡した。弥夜は軽く頭を下げ、紙を受け取った。

「姉上、庭園に堇が咲いておりますので姉上に持ってきました」手に持っていた堇を弥夜に差し出した。

「まあ、とても綺麗、ありがとう」

堇から春の匂いがほのかに香ったので自然に笑みがこぼれる。李梗は、弥夜の笑顔が見られたことが何より嬉しかった。

姉妹の周りに穏やかな雰囲気となつているところに、咳払いが聞こえた。

た。

「コホン！ 花など、どうでも良いではない……。今、弥夜様は勉強中なので、室に入るのは控えて下さらなければ困ります」

講師は、憤慨な態度を見せた。まだ、勉学を学んでいない李梗が断りもなく室に入ることが不謹慎だと感じた。

「花をあげれば、姉上は、お喜びになると……」

李梗は、今にも涙腺が緩みそうだ。

「やめなさい。私の妹ぞ。勝手に室に入ったが、悪気はなかったです」

「これは、とんだご無礼を」

弥夜の言葉で講師は慌てて、畳に頭を下げた。

弥夜は優しく、李梗は心から慕っていた。母親は、違っていたが姉妹の絆は強かった。弥夜は純粹で心優しい姫である。

いつも穏やかで大変、賢い女子である為、手下からも慕われていた。

弥夜も李梗を大切に思っていた。この姉妹の絆はこれから深くなっていくだろう。

ある日、女官が李梗に

「姫様、王様が今すぐに王室に来られるようにのことに御座います」と言った。

「父上が？」

王が呼ぶなど滅多に無かったので戸惑いを見せる。眉間のしわを無意識に寄せた。

……何か大変なことが起きたのかしら。

良からぬことばかり考えていたら王の室に着いた。

王の室は広大で、玉座には豪華な金箔が施され豪華絢爛である。

王の威厳が見事に玉座に表れている。

「王様、李梗様に御座います」

真っ直ぐ李梗を見た。針が突き刺さったような視線を感じた。

手の甲が湿っぽくなっていくのが分かる。中に入ると王は静かに、李梗にこう告げた。

「話があって呼んだ。お前も、もう八つだ。そこで、従者を用意した。従者の者こちらに参れ」

王がそう言うのと部屋の奥から人影が見えた。人影は、少年であった。

当時では見かけない斜め前髪で、後頭部より低い位置に髪を一つに束ねている。

長さは、束ねても肩についてなかった。少年の身長は五尺七寸（約百七十二センチ）あるだろうか。

……この者が、私の従者。

その背丈は、無意識に少年を見上げてしまった。

「冴と申します。今日より姫様のお側近く仕えさせていただきます」
少年は、李梗の元へ歩み深く頭を下げた。慎み深い雰囲気を漂わせる。

「冴、これよりお前の主は、李梗だ。我が、娘を侍む」

王は、冴に威圧するように言った。

「御意」

冴は、王の威圧に何も感じなかったのか、気魄な様子で返事をした。

王の室を退室し、二人は李梗の室に向かった。

冴は、李梗より三つ歳が上だった。冴は、実年齢より年上に見えた。

眼は切れ長で鼻筋が、すっと通っていて、顔が整っている。

廊下を歩いている時に聞こえるのは二人の足音しか聞こえない。

李梗は、冴をちらりと見た。

冴は、顔色ひとつ変えず前を見ていた。どこか掴み所がない男である。

二人の間の空気が重苦しい。その空気に耐えかね、李梗は話しかけた。

「この王城はとても美しいでしょう。池もあって綺麗よ。きっと、貴方も気に入ると思う」

冴は、少し間を空けたが、受け答えた。

「そうですね。姫様は、この国は好きですか？」

いきなり、何を言うのだろうか。この国の姫なのだから好きなのは当然だ。

「もちろん、好きよ！」

李梗は、何の曇りも無い笑顔で答えた。

「ふーん。俺はこんな国、嫌いです」

「えっ」

予想もしていなかった言葉が返ってきて、顔がこわばった。冴は、歩くのをやめて立ち止まった。

そして、李梗の顔を見下ろした。

「あんたみたいに大事に育てられている者には分からないとは思いますがね」

自身が仕えようとする姫君に対し無礼ほどがある。口調も人を挑撥するような言い方であった。

冑は、形振り構わず言い続けた。

「この国と敵対している淋城国りんじょうこくとの戦で俺の兄上は死んだ。兄上は、この国に忠義を誓って今まで働きをかけたのに、この国は、兄上を囚にして見殺しにした！」

冑は、その厳粛な雰囲気覆すように怒号した。眉間のしわが中央に引き寄り顔を歪めた。

冑の兄の名は、海かいと言い、武官として優秀であった為、国の功績の為に囚として命を落とした。冑は、兄と同様に才気である。まだ、十一歳であったがその年で首席が認められた。

しかし、冑は兄がいたからこそ出来たのだ。

いつも援護してくれ、たった一人の身寄りでもあった。それを喪った悲しみは胸が張り裂けそうな痛みであった。その怒りの矛先を全て李梗に突き付けた。

冑の拳は徐々に震えてきた。

無表情だったのではない。その眼は、どこか冷めているようだが憎しみを抱えている眼であった。冑は、ずっと懔然していた。幼い冑は孤独と耐えてきたのだ。

……憎い憎い。こんな国、さっさと滅ぼされればいい。

頭の中で何度も冑は連想した。

「……………」

李梗は、姫なのはこの国のことを何も知らなかった。知ろうとも思わ

なかった。

自分が幸せなのは、多くの命が喪われる代償となっていること知った。

やるせない思いのまま、李梗は、冑の側により手をとった。

「あなたがこの国を滅ぼしたいのなら、私が王になってこの国を変えてみせる」

「はっ？ この国が簡単に変わるとは思いませんが……。運命はそんな

に変わらない」

冑は、その手を荒々しく振り払った。

それでも、李梗は構わず話しかけた。

「それは、あなたが決めるものではない。運命が決める」

李梗は、真っ直ぐ冑を見た。その眼を見た冑は、身体に電気が走ったかのように動けなかった。

これが、王族というものだろうか……。

……いや、そんなはずが無い。

冑は、我に返り、李梗に突き刺すように言った。

「なら、俺は、あんたを王にするよう補佐する」

冑は、正直この姫の言う事なんか当てにしてなどいなかった。

王族など嘘偽りだらけで、己の名誉なら他人を切り捨てる生き物だと思っていた。

「冑……。ありがとう」

「勘違いしないで下さい。あんたの為じゃない。どうせ、今の王は兄上の

事なんか気にかけもしない。あんたが、王になって、兄上を供養しろ」

そう吐き捨てる冑は、先に行ってしまった。その、後姿を見つめなが

ら、李梗は呟いた。

「約束する」

冑は、自室に戻り、荒々しく座布団に座る。腕を組み、眼を閉じた。先程の事を考えた。

……何だ、あの姫は。

無礼な振る舞いをしたのに咎める事もなく、挙句の果て、王になると

誓うと言い出した李梗を奇異な姫だと思った。

それから、数日後。

「おい、聞いたか。王様が、李梗様に従者をお付けしたそうだ」

「ああ、そうらしいな。なにしろ、その従者は背丈が随分大きいそうだ」

冴の噂は、王城内で広まった。やがて、あの方の耳にも届いた。

「何？ 李梗に従者が。父上様に会わせよ」

なにやら、腑に落ちなかった。その真相を確かめる為にも王の室に行

った。王の室が遠く感じる。足に重石が付いているようだ。

やっと王の室の前に着いた。ふっと、息を吐きながら着物を整えた。

「父上様、弥夜に御座います」

「入るがよい」

襖を開けると王は書物を読んでいた。書物は、儒学書のようなうだ。

「どうした？」

王は、弥夜の顔を見て何かを察したのか儒学書を閉じ文机の上に置いた。

「李梗に従者を付けたことはまことでございますか？」

不安そうな眼で王を見た。

「何を不安そうにしている。李梗に従者を付けたのが気に食わないのか」

王の威厳に弥夜は、怯みそうになった。

「ですが、李梗は、まだ八つ。姉である私には従者を付けず、何故、李

梗に付けたのですか？」

「お前は、聡明であるため、従者はいらないと思っておる。不安に

なる

事はない。お前なら従者など付けなくとも優れておるからだ」

別に不安になどなっていないと自分に言い聞かせた。なぜ、妹が優遇

されたのかその理由を聞く為に自分は王の室へ参ったのだと分かったと

きその事実を受け入れることができなかった。

しかし、王から気に食わないのかと問われたがはっきり否定できなかった。

た。

自分は聡明だという理由で従者を付かないと言われたが怪訝な顔をする。

弥夜は王の室を出て、自室に帰る途中だった。

「姉上！」

向こうから弾んだ声が聞こえた。

こちらに向かって来たのは李梗だった。

「李梗ではないか。どうしたの？」

弥夜は、この状況が少しいたたまれなかった。

「姉上が見えたのでお声かけしました。どこへ、行かれていたのですか？」

「ちよつと、用事があってな」

弥夜は、李梗の後ろにいた少年に気が付いた。

ぺこつと頭を下げたのは冴だった。

「李梗様の従者の冴に御座います。お初目にかかります」

この男は、表面上、謹厚である。なにか、不服を感じた李梗だった。

「冴、妹を頼みました」

「承知しました」

李梗は、冴ばかり話すので愀気な気分になった。弥夜の小袖を引っ張った。

「姉上、天氣が良いので、花摘みに行きませんか？」

「すまぬ。これから、講義があるからまた、今度に」

本当は、講義などなかったが今はこの場を離れたかった。

「はい……」

李梗は、顔を曇らせ返事をした。

李梗がその場を去った後、胸に一寸の針が刺さったような痛みがした。

「あの者が、冴か」

長身で顔が整っている。歳は、李梗より三つ上だと聞いた。あの眼は

全てを見抜くようなしている……。

弥夜は、冴の底知れぬ何かを感じ取った。

その時、水滴の音が聞こえた。水滴の音は、徐々に大きくなり中庭に咲き誇っている朝顔が雨に打ち付けられる。

弥夜は、欄干に手を置いた。手は、みるみるうちに水で濡れていく。

「嵐になりそうだ……」

二

「すごい、豪雨だな」

冴は、頭から濡れていた。髪の毛先から水滴がぽたぽたと垂れ肩を濡

らす。

頭を掻き立て何とか水滴を落とした。なぜ、冴は濡れたのか……。

それは、弥夜と別れた後に二人は庭園で花摘みをしたのだ。急に雲行きが怪しくなったので慌てて走ったら李梗は、足を滑らし転んでしまったのだ。李梗を何とか起こしていたら雨に当たったということだ。

これじゃ、身が持たん。弥夜様にお仕えした方が良かったかも知

れない。姉姫の方が、聡明そうだったし、弥夜様のところに鞍変えしてもらおうか……。

と冴は、思った。

自室に戻るため、廊下の角を曲がろうとしたとき、角部屋から男達

の話し声が聞こえる。部屋には、数人で、ひそひそと何やら話をしているようだ。

他人の会話など興味もないので、冴はその場を去ろうとした。

その時、自分の名が聞こえた。一步出した足を元に戻し、耳を澄ました。

「二の姫様にくっ付いている冴と言う男を見たか？」

「遠目から見た。まだ、十一だそうだ」

どうやら下働きの男達は、冴が気になるようであった。

「十一？　ずいぶんと幼い従者を王様はお付けしたんだな」

「その若さで姫君の従者になれるなんて羨ましいもんだ」

男は、鼻で「はっ」と笑った。

「将来は、大臣に任命されたりしてな。全くいい気なものだな」

男達は、小馬鹿にしたように笑った。

その笑い声を聞いていた冴は、その場を離れた。

そして一言、呟いた言葉は……。

「くだらん」

怒り

李梗と冴の関係は変わらない日々が続いた。

季節は、初冬を迎える。

朝日が昇ると清冽な空気は陽の光が、王城を包み込み、神々しく輝く。

陽の光は李梗の寝室に差し込んだ。その光に目を覚ます。

うつすらと眼を開けると天井が見えた。

天井には、鳥が描かれており秀麗である。

いつもより遅い時間に目覚めたことに気付く。

毎朝、冴が起こしに来るのだが。冴の姿はなかった。

李梗はまだ、冴は寝ているのかもしれないと思った。床から起き上がり

乳母を呼んだ。

「今から、冴の室へ参る。着替えの用意をお願い」

「かしこまりました」

蜜柑色に椿柄の着物が李梗に良く似合っていた。

襖を開けると寒気が顔に突き刺さる。息を吐くたびに雪のような色が出た。

冴の室の前に着いた。

「冴、まだ寝ているの？」

返事はなかった。辺りは、静けさを増す。

李梗は、襖を静かに開けた。そこには、冴の姿はなかった。

布団も片づけられてあった。室に入り辺りを見渡す。

「何処かへ出掛けたようですね」

乳母は。ため息をついた。

主を置いていくとは従者として、あるまじき行為だと呆れれ

る。

乳母とは裏腹に李梗は

「何処へ行ったのか……」

と落ち着いていた。

「姫様、一先ずここを出しましょう」

自室に戻ろうとしたが、何かを察した。向かったのは普段、
冴が出入りをしている場所だった。

冴の草履がないことに二人は気付いた。

「やはり何処かへ……。無断外出とは何事か」

乳母は憤った。

「もしかしたら、王城を出たのかも」

李梗は急ぎ、城門に行った。

「二の姫様？ どうされたのですか？」

門衛は、李梗の姿に大変驚いた。

城門に立ち入ることなど滅多にないからである。

「私の従者、冴を見なかった？」

しだいに李梗の顔が不安になっていった。

「あの者でしたら朝早くに王城を出て行かれました」

乳母は李梗の顔を見た。

「何処へ行ったのか聞いておりますか？」

乳母にも焦りの顔色が見えてきた。

門衛は横に首を振った。

「そ……う」

李梗は肩を落胆した。

すると門衛は思いもよらぬことを口にした。

「従者の荷物の中をほんの一瞬見えたのですが、線香や蝋燭が入って
おりました。」

誰かの命日なのでしょうか？」

その言葉に、

……海^{かい}の墓参りだ！

李梗は気付いた。

李梗は、乳母に冴の実家を調べるように命じた。

無断外出は、兄上の墓参りだと知られたくなかったからだろう。

乳母は、冴の履歴書が保管されている場所へ行き管理者に頼んだ。

冴の実家は王城から一里（四？）ほどで近くにあることが分かった。

「冴のそこへ参られるのですか？ あの方はそのうち、お戻りになるはず」

その言葉に不安を感じる。

なぜか、今すぐにでも冴の元に行かねばならない気がした。

「すぐに参る」

勝手に城門を開けようとしたとき、門衛に止められる。

「王様からの許可がない限り、お通しするわけにはまいりません」

「どきなさい！」

李梗の顔が怒気で赤く染まった。

乳母は、李梗が声を荒げるのを初めて見た。

「姫様、どうしても参るのなら王様に許可を貰いに行きましょう」

「それでは、時間が掛かるでしょう」

顔に焦りが見える。乳母は、李梗に哀憐を感じた。

いつまでも、城門にいるわけにもいかなないので李梗を連れて行くとしたとき、

「王様からの許可なら貰った」

二人の背後から聞こえた声は……。

「姉上！」

そこにいたのは、弥夜と護衛官であった。

「李梗が、冴を探していると聞き、あなたなら王城を無断で出ると思い勝手ながら」

父上に許可を貰いました」

「姉上……。有難う御座います」

思わず涙が、ほろりと出てしまった。

「泣くでない」

弥夜は、穏やかな笑みで、涙を指でソツと拭う。

弥夜は、城門の前に立ち、門衛に言った。

「扉を開けよ」

城外に出たことがなかったため、見るものが初めてであったが、李梗の頭の中は

冴のことはなかった。

冴の実家は、街外れにあり、ひっそりと一軒だけ建っていた。外観は、さほど大きくはない。中の様子を見るため、戸に手を掛けゆっくりと開けた。

室内を見ると、物がほとんど無かった。

あるのは、古びた棚と一つの机がある。実に、殺風景としていた。少し埃臭い。李梗は、履物を脱ぎ、畳の上に足を踏み入れた。

畳が、ギシツと鈍い音を立てる。

弥夜は、隣にある室に入った。そこも、殺風景であった。

「ここには、冴はいないようで」

どうやら、家の中には今はいないらしい。

乳母は、

「姫様、いかがなさいますか？」

と李梗に尋ねる。

すでに王城に戻っている可能性もある。

……でも、帰っていなかったら。

先程の不安が李梗を襲う。

李梗の青ざめた顔を見た弥夜は

「家の付近を隈なく調べなさい」

と護衛官に命じる。

「承知しました」

弥夜は、李梗に、

「大丈夫」

と頭を撫でた。

その言葉に安堵したのか李梗の顔が柔らかくなった。外では、護衛官の上役が配下に命を伝えた。

「限なく探せ。少しでも怪しい物があらば、至急に伝えよ」
しばらくすると、一人の護衛官が何かを見つける。

すぐに、李梗と弥夜に伝えられた。

「姫様、何やら怪しい細道を見つけました」

「細道？」

李梗は、眉を顰める。

「場所はどこにあるのです？」

弥夜も眉を顰めた。

「細道は家の裏側にあります」

李梗は、弥夜の手を取った、

「姉上、参りましょう」

その場所へ行くと確かに細道があった。

「ここに冑が通ったかもしれない」

しかし、確信はない……。

細道は、枝に覆われており空洞になっている。

所々に枝が伸びていた。

その細道は、弥夜と乳母に不気味さを感じさせる。

「私、ここを通ります」

李梗の眼は、ただ細道の奥を真っ直ぐ見ていた。

弥夜は、李梗の手を取り、頷いた。

入り口に三人の護衛官の見張りをつけ、李梗達は中へ入って行った。

そこは、大人が一人歩けるほどしかない。辺りは静寂としていて、
小鳥の囀りさえも聞こえない。

不気味さを増す。

歩き続けると先にぼんやりと光が見えた。

細道をぬけるとそこにあったのは……。

目の前に、開けた空間があった。周りの木々に覆われており、かすかに小鳥の囀りが聞こえる。

その中央には、墓石が三つ建っている。陽の光が差し込み、神が舞い降りたかのような光景であった。

その場所だけ、別世界に感じる。

墓石の前に人影が見えた。

李梗は、人影の方へ、静かに近づく。その人影は、捜していた冴であった。

声を掛けようとしたとき、冴の顔に李梗は眼を奪われた。

冴は、両手合わせ祈りをしていた。

伏し眼が、怒りでも悲しみでもない……。でも、儚い眼をしていた。

李梗は、その姿を美しいと思った。

冴は、祈りをやめ、立ち上がった。

そこで、ようやく李梗達に気付いた。

冴は、顔を強張らせた。

「なぜ、ここに……」

声を絞るように言い眼を逸らした。

李梗がこの場所に来たことを心地良くなかった。

冴の態度に乳母は、我慢できず叱咤した。

「そなたが、無断でいなくなったのであろう！ 姫様がここまで足を運ばせて下さったのに何だ、その態度は？」

李梗は、乳母の小袖を引っ張り、

「やめて」

と言った。

冴は、そんなことを気にせず、乳母を鋭い眼つきで睨んだ。

先程の眼とは違い、憎しみに満ちている。

乳母は、体が硬直し、声を発することすらできない。その視線は李梗に向けられた。

「私……、冴が心配で」

冴は、それを聞いて鼻で笑った。

「心配？ 何がですか？」

冴は、李梗の元に近付いて来た。

改めて見ると冴の背丈に、威圧された。

それでも、冴の眼を反らずにいた。

冴は、墓石に眼を向ける。

「なぜ、武官である兄上がこのような場所に眠らねばならない。

国のため命を捨てた兄上を、王はこんな……。誰にも人目の付かない場所に……」

声を震わせている。眼には、涙が溜まっていた。必死にこぼれまいと堪えている。

冴は、この場所に墓石が建ったとき、王は、海が存在を消したのだと、ずっと一人で涙を流していたのだ。

「こんな場所に誰が来るか」

顔を李梗の方へ向けた。

「許すか……。俺は、王も、その娘であるあんたも！ こんつ、こんな国……。さっさと滅んで、王も、あんたも死ねばいい！」

冴の声は、静かな山林に響き渡った。冴は鼻をすすると、後ろにいた護衛官を退け、細道の方へ姿を消した。

李梗は、その場に動けず、立ったままだった。

一粒の涙が、頬を伝った。そのとき、風が李梗の髪を靡かせた。

三

「李梗様を思うと胸が痛みます……」

乳母は、深いため息をついた。

「そうですね……」

弥夜は、李梗がいる方へ、悲しげに見つめていた。

冴が胸の底を打ち明けた日から二日経った。

あの後、李梗達は、王城に戻ると冴はすでに戻っていた。

冴は、いつもと変わらない態度で李梗に接した。それは、従者としての

役目をこなしているだけであろう。

李梗は、冴にどう、接すればいいか分からないみたいであった。弥夜は、李梗に慰めることしかできないことが心苦しかった。

「冴が、李梗に心を開いてくれたら……」

乳母は、弥夜の言葉に決心をし、ある場所に向かった。

龍の子

「王様、乳母がお目通りを願っております」

宮女が言うと王は答えた。

「通すがよい」

乳母は、いそいそと中に入って来た。

「何用じゃ？」

王の威厳なる態度は毎度ながら冷や汗が出る。

ここで、下がってしまえば終わりだ。

乳母は、負けんぞと王の顔を強い眼差しで見た。

「王様、ご無礼を承知で申し上げます。李梗様の従者をお代えすることを願ひ存じます」

王は眉宇を顰め、眼を細めた。

その眼は、大蛇如く容赦しない。

「なぜだ？」

乳母は、これまで冴の振る舞いを事細かく話した。

「先達では、王様与李梗様に恐れ多いことを口に出したのです」

「何を申したのだ？」

乳母は、口を濁らせた。

「それは……。私の口からは申せませぬ」

畳に手を添えて頭を下げた。王に『死ね』と口を裂けても言えなかった。

言ったとして、お怒りになり自分も巻き込まれる。それは、勘弁だ、と思った。

「王様、私は、あの者が李梗様に何をするかと思うと夜も眠れませぬ」

声を震わせ、縋るような眼で王を見つめた。ここまで、必死に訴えれば聞き入れてくれるだろう。

「落ち着け。冴は、何もせんよ」

その願いは虚しく打ち碎かれる。

思わぬ言葉に現に『死ね』と言った男ぞと思った。

「お前には、まだ分からぬだろうがな。余は、あの者だから李梗の従者にした」

「はあ……」

ため息をついたのはこれで、何度目だろうか。

王は何を考えているのか皆目分からない。あの者さえいなければ李梗様が泣くこともないと思った。

乳母は、下を向きながら渡り廊下を歩いていた。

その時、冴と鉢合わせをする。

「姫様はどうした？」

蔑むような眼で冴を見た。

「弥夜様の室におります」

冴は、一礼をし、乳母の横を横切った。その姿を乳母は嫌悪した眼で追った。

それから、七日が過ぎた。

霜が中庭にある葉に付く。

和宮国は、本格的な冬を迎えた。

「李梗、これでは短く切り過ぎです。もう少し長めにしなければ」「はいっ」

弥夜は、孔雀草を渡した。

「はあ……」

何度もため息をしてしまう。

王は何を考えているのか皆目分からなかった。あの者さえいなければ李梗様が泣くこともないと思った。

乳母は、下を向きながら渡り廊下を歩いていた。

その時、冴と鉢合わせをする。

二人は対面した。そこに李梗の姿はない。

「姫様はどうした？」

蔑むような眼で冴を見た。

「弥夜様の室にあります」

冴は、一礼をし、乳母の横を横切った。その姿を乳母は嫌悪

した眼で追った。

それから、七日が過ぎた。

霜が中庭にある葉に付いていた。

和宮国は、本格的な冬を迎えた。

「李梗、これでは短く切り過ぎです。もう少し長めにしなければ」

「はいっ」

弥夜は、孔雀草を渡した。

李梗は、弥夜に生け花を教わっているところだ。

「でも、この花は霜月に咲き終わるはずなのによく見つけましたね」

「あっ、それは……」

睦月となったこの時期に咲いてなどいなかった。李梗は、花瓶に挿してあった孔雀草を勝手に持ち出した。

そのことは、弥夜は知る由もない。

李梗は、苦笑して誤魔化した。

「出来ました」

李梗の生け花は、堂々たる姿をしている。誇り高い花のようであった。

一方、弥夜の生け花は、可憐で控えめであった。

「やはり、姉上の方がお上手です」

自分と比較して弥夜の方は全体を考え生けている。

「生け花は、上手い下手ではなく、花をどう表現するかが大切なのですよ」

姉の名言に李梗の眼が輝いた。

姉妹が生け花をしている頃……。

李梗の迎えに上がろうと弥夜の室に向かっていた。

冴は、李梗に言った言葉に少し心苦しさを感じていた。

あそこまで言うつもりなどなかった。だが今更、素直になるつもりもなかった。

そんなことばかり考えていたため、無意識に下を向きながら歩いていた。

左角を曲がろうとした時、誰かとぶつかってしまった。

冴は、よろめいたが、体勢を整え何とか耐えた。

しかし、相手側は、尻餅をついてしまった。

相手の身なりを見ると高価な着物である。

「どこを見て歩いておる！」

「申し訳ありません」

そう立腹した者は、大臣であつた。年齢は、三十八くらいだろうか。

大柄な男である。

後ろにも一人、大臣がいた。同じ歳と思われる。

大臣は、乱れた着物を整え、冴を眼に角を立てて見た。

「お前、海の弟ではないか」

後ろにいた大臣が、

「その眼つき、あの男によう似ているな」

と鼻で笑った。

冴は、相手にする気にもなれずその場を離れようとした。

「お前は、兄上の功績が認められなかったことに何やら不満を抱いているようだが、勘違いをしているのではないか？」

冴は、足を止め、振り返らず背を向けたまま、

「何がですか？」

「死んで当たり前だつたと言っているのだ」

冴は、刺すような視線を放した。

「黙れ」

と言った。

「何だと？」

大臣の顔が赤黒くなる。憤慨した大臣は、冴の顔に強い拳を入れた。

冴は、尻餅をついた。唇から血がにじみでてくる。

立ち上がろうとした時、冴の喉に刀の閃光が放った。

大臣は、冴を蔑んだ眼で見下した。

「いいか。お前の兄が認められなかった理由は、ただ一つだ。それは、無能だからだ。無能な者に誰が認める？それだけのことだ」
眼を見開き、己の考えが間違いないと言わんばかりであった。

冴は、手を強く握り、唇をかみ締める。血がたらたらと顎から滴り落ちた。

この男を殺してやりたいと思った。

「その、憎らしい眼をくり抜いてもいいのだぞ」

大臣の口元に嘲笑が浮いた。

弥夜と李梗は、襖の隙間から冴が、殴り付けられたのを見てしまった。弥夜は、すっかり怯えてしまう。

「姫様方、危のうご御座いますので、奥へ」

乳母は、二人を奥へ連れて行こうとした時であった。

李梗は、掛け軸の横に置いてあった棒を手に持った。

「姫様！」

乳母は、李梗を取り押さえようとしたが遅かった。

「誰に刀を向けておる！」

大臣は、怒声が聞こえた方へ眼を向けた。

瞬間、李梗は、刹那に大臣の刀を横に薙ぎ払った。

李梗の眼は、大臣をとらえた。

大臣の体に稲妻が落ちたように動けなかった。

その眼は、大蛇如くであったからだ。普段の可愛らしい眼付ではない。

李梗は、大臣に言った。

「燕雀^{えんじやくいくす}安くんぞ鴻鵠^{こうこく}の志を知らんや」

これは、中国に伝わる史記の言葉で小人物には大人物の大きな志や考えが分からないという意味である。

大臣は、かろうじて口が動くことができた。

「それは、どういう意味でして？ 私はこの者が、二の姫様に無礼を働きかけているとお伺いしております故、戒めたわけに御座います」

白を切ろうとした。

「黙りなさい！そなた達には分かるまい。無能が有能に蔑まれる気持ちなど」

「我らが無能？」

大臣の顔が赤く噴き出す。

その顔に棒を突き付けた。大臣はうろたえる。

「私は、海を誇り高き男だと思っている。その弟である冑も！」

大臣は、言い返すことができなかった。

「去れ！次は、ないと思え」

大臣は、落ちていた刀を拾い一目散に去った。

その姿は、鷹に無惨に追い払われた惨めな鳥のようであった。

た。

冑は、まだ臀部を床にしていたまま硬直していた。

今の出来事が信じられなかった。八歳の女子が、全身に矢が射抜かれたような眼をするとは。

……これが、龍の子。

李梗の堂々たる立ち姿が、天から舞い降りた龍に見えた。

その姿を強い眼で見た。

「冑……」

冑の顔を凝^{じつ}と見つめる。言葉がけに逡巡した。

李梗の顔も普段の顔つきとなる。

「姫さん。あんた、馬鹿じゃないのか。あのようなこと申して、大臣の機嫌を損ねたら、あんた王になれなくなるかもしれないですよ」

沈黙をしていた冴が口を開いた。

それを聞いて、李梗は、

「冴に言われたくない」

冴は、その言葉に納得する。姫君に、『死ぬ』と言ったのだから。

李梗は、真っ直ぐと力強い眼をした。

「冴、私に王になり、海を供養しろと言いました。約束します。でも、あなたにも遣るべきことはある。あなたは、傑物となり兄上の功績を天下に示すの」

バサバサ。

欄干に留まっていた鳥が、飛び去った。

李梗の威厳に息を飲み込んだ。

「姫様は、恐ろしゅう御座います」

それを聞いて、李梗は動揺した。

「えっ、恐ろしいって……」

その時、冴は笑った。かすかな笑みを浮かべ李梗を見た。

「ふっ」

つられて、李梗も笑った。

肌では感じられない柔らかな空気が流れた。

その様子を弥夜と乳母は、安堵したのか互いの顔を見て

笑った。

早朝に初雪が降り注ぎ、王城や街も白銀となった。

李梗の室に冴の姿があった。

「将とは、智・信・仁・勇・厳なり」

これは、将として具備すべき資質は智力、信頼、仁愛、勇氣、厳格という意味である。

「将とは、智・信……」

冴の言葉を聞くのに必死で上手く言えず、突っかった。

「姫様、焦らず、的確に覚えるのが大事です」

李梗は、冴に兵法を教わっていた。

さすが、十一歳で首席を認められた才がある。

「三軍の衆、必ず敵を受けて敗るること無からしむ可き者は、奇正是れなり」

「この意味は？」

と李梗は、問うた。

「全軍が敵の攻撃を受けて敗れないようにするためには、正攻法と奇策との適切な使いわけが必要という意味です。軍は、三軍から成り立っておりそれが、全軍・中軍・後軍というものです」

兄が武官であったせいか戦の仕組みをよく理解している。

李梗は、兵法とは思議だと思った。

「では、次に行きます」

「はいっ」

四

王城の庭園が紅蓮の葉に染まっている。

秋風が靡き、縁側に腰を掛けている少女の膝にひらひらと落ちた。

少女の容姿は、幼さを残しているが凜としている。

そこに、

「姫様、茶を入れましたので、どうぞ」

と茶を差し出したのは少女の従者である冴だ。

あれから、六年の歳月が流れた。

十四歳となった李梗は、王城で佳人（美人）だと噂されていた。

十七歳となった冴も元々、顔立ちが良かったせいから端正とな

った。宮女達もその容姿に見惚れるほどである。

「ありがとう」

茶を飲んでいると、声がした。

「冴殿」

声は、王城の取締りをしている者であった。

「急だが、そなたに部下が付くことになった」

冴は、目を丸くする。

「私に部下ですか？」

「そうだ、そなたは昇任する。詳細は明日にする」

「承知」

李梗は、それを聞いて喜んだ。

「冴も出世するのね。おめでとう」

屈折のない顔に、

「はぁ……」

と答えるしかなかった。

人と係わることが苦手な冴は、面倒なことになりそうだと早くも直感した。

翌朝、冴は自室で何やらで出掛ける支度をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5661y/>

雪花

2011年11月27日23時03分発行